

## 1992 上半期

### 1. 新人歓迎山行 (雲取山) 4月25～26日 参加・田形、寺島、三谷

4月25日(土・晴れ) 奥多摩駅=鴨沢→雲取山荘テント場 (雲取山往復)

早起きして立川駅集合。船橋に住んでいる三谷はさすがに眠そう。奥多摩駅でバスに乗り換え、終点鴨沢で下車。鴨沢からは登山道をタッタカ雲取へと向かう。雲取山荘のテント場にテントを張った後、雲取頂上へ登った。頂上に新設された避難小屋は近辺の営業小屋の経営を圧迫していると言われるだけあって、立派なものだった。ちなみに、この日のわれわれのテントは春合宿でポールの曲がったままのエスペース TENT だった。

4月26日(日・晴れ) →鴨沢=奥多摩

この日は鷹ノ巣山から石尾根経由で下山予定だったが、三谷の足の調子が悪いので、往路を戻った。しかし、新人歓迎山行で、たった一人の新人が「ぼくは一人で鴨沢の下りるので、先輩たちは予定通りに行って下さい」と言うとは思ひもしなかった(文責 寺島)。

### 2. 新人歓迎山行 (那須岳) 5月3～4日 参加・田形、古瀬、和田、笠巻、澁沢、秋元

5月3日(土) 上野=黒磯=那須山麓駅→峰の茶屋→三斗小屋温泉

バスが渋滞で遅れ、茶臼岳往復をとりやめる。予想していたよりもかなり寒く稜線の西側にはまだ雪がたくさん残っていた。夕食後に田形、秋元、和田はヘッドランプをつけながら露天風呂につかる。

5月4日(日) →清水平→北温泉=黒磯=上野

昨夜雪が降った。しかし滑落などの危険がある場所は無いので安心である。清水平付近で現在位置がわからなくなり、しばらく地図と相談。熊見曾根と朝日岳を間違えていたらしい。あまりもの強風、吹雪のため、全員吹き飛ばされそうになりながら歩く。寒さに耐えきれず、三本槍登頂をあきらめて下山(文責 和田)。

### 3. 個人山行 (飯出連峰) 5月2～5日 参加・寺島、引地 OB 夫妻

引地 OB に誘われての山行。五月晴れの下、T シャツで汗をかきながらの飯豊連峰縦走のはずが、、、、

5月2日(土・晴れ) 山都=御沢

山都駅からタクシーで御沢まで入りテント設営。寺島は天気図をとりそこなう。

5月3日(日・晴れ後雪) 御沢 7:15→三国岳 11:45→切合小屋 13:15

笹平までほとんど雪は無い。笹平から雪が出てくるがさしたる難場も無く、しっかりと付けられたトレースの上を剣ヶ峰へと進む。地元の人から「アイゼン、ピッケルを使ってやっと越えられる」と言われた剣ヶ峰だが何となく越えてしまった。この頃から雪が少し降りだす。三国小屋からはなだらかな道を切合小屋へと向かう。結局この日はアイゼンを使わなかった。切合小屋の出入りは冬季小屋の2階の窓から。連休初日ということで、我々のあとからも続々と登山者が来て、小屋は冬季小屋、夏小屋とも満員となる。この日の夕飯は引地 OB 自ら作られたと言うペミカンの入ったカレーだった。夜になり激しく吹雪きはじめる。

5月4日(月・雪) 切合小屋→本山小屋

朝から吹雪で真っ白。様子を見ることにする。他のパーティーもやはり様子を見ている。9時頃になり、じれたパーティーが飯豊本山往復に出発する。我々も朝の気象通報からこれ以上悪くな

ることはなかりと判断し、また、吹雪も弱まった（ようだった）ので、本山小屋に向けて出発する。クラストしていたので草履塚からアイゼンをつける。この頃より吹雪が再び激しくなり、本格的な冬山の様相を帯びてくる。しかも、この吹雪と言うのが、つぶてのようなと言う形容がぴったりのもので、加えて、本物の石も飛んで来て痛くて顔を上げられない。途中、先行パーティーが打ち付けていった篠竹に助けられながら、本山小屋に辿り着く。この小屋も二階の窓からの出入り。小屋は我々の貸し切り。翌日の行動については杖差岳を越えて大石と言う完全縦走の計画は諦めて、天気良ければ梅花皮小屋か門内小山まで進み、梶川尾根か丸森尾根を下山することとし、悪ければ往路を下山することとする。この日の夜は前夜とは打って変わって実に寒かった。

5月5日（火・雪のち晴れ）本山小屋→切合小屋→三国岳→御沢→川入＝山都

この日も前日同様の吹雪とホワイトアウト。様子を見るが一向に良くなる気配も無いので往路をもどることとする。が、皮肉なことに本山小屋を出発すると次第に天気が回復しだす。x x x x x xは雪もあまりついてなく問題なく通過し、快的なペースで切合小屋に着く。二日前は無かった雪庇が、右に左にと大きく発達していた。下山すると決めた時から気になっていた剣ヶ峰は二日前とは様相が一変しており、岩肌はどこにも見えず、雪がついた瘡せ尾根となっていた。風はあったが天気はよかったので特に問題もなく通過した。高度を下げるにつれ雪は減り、川入でタクシーを呼び、下山。雪山の経験の少ない自分にとっては得るところの多い山行であった（文責 寺島）。

#### 4. 文登研 春山研修会（剣岳周辺） 5月16日～22日 参加・寺島

5月16日（土）講義：研修所にて確保技術等についての講義。

5月17日（日）講義：研修所にて登山の医学等についての講義。夜に翌日以降の入山食の買い出し。

5月18日（月）入山：室堂から地獄谷を通り剣沢へ。この日は雪洞で寝た。

5月19日（火）雪訓：歩行練習、滑落停止、グリセード。

5月20日（水）雪訓：確保練習（スタンディングアックス、タイトロープ）、搬送。

5月21日（木）本峰アタック：我々の班は別山尾根から登り平蔵谷を下った。

5月22日（金）下山、解散。

参加する前に先輩に散々脅かされたが、言われたほどにはきつくは無かったように思う。しかし、班によって（講師によって）かなり違うようなので一概には言えないだろう。部での雪訓のカリキュラムは文登研のやり方にのっとったものとなっているので初めてやるようなこと、聞くようなことと言うものはあまりないが、内容の濃さ（質問にはきっちりこたえてもらえるし、技術もみっちりみてもらえる）から、また他大学との交流と言う点からも次年度以降もできる限り参加した方が良いだろう（文責 寺島）。

#### 5. 雪上訓練（北岳大樺沢） 6月6～7日 参加・天羽、田形、寺島、古瀬、湧沢、笠巻、三谷

6月6日 気温が非常に高い。途中手頃な雪渓が有ったので、そこで少しキックステップの練習をする。低木帯で雪訓に使わない装備を置いて、雪渓を登る。雪質はザクザクでありよくない。そのため、ピッケルストップの練習は不十分なものにならざるを得なかった。この日の訓練は上級生の罵声かとぶこともなく、比較的平穩無事に終わった。が、しかし、荷物を置いていた場所に戻ると、何者かによって荒らされたらしく、悲惨な状態であった。散乱するレーション、跡形もなく食い荒らされたインスタントラーメン、ビニール袋やテントマットに残された無数の爪痕。そして何故か無傷な現金。結局、これは猿の仕業であるとの結論が出された。全く、油断も隙も無い。

6月7日 付近の山間にガスが濃く垂れこめ、少しずつ北岳の方へ流れてゆく。雪は心配していたほど歩きにくい状態ではなかった。主にスタンディング・アックスビレイを練習する。事前に学習会をしていたため、それほど混乱は無かったが、一年生にはやはりうろ覚えのところが多くなかった。それでも一通りメニューをこなし、尻セードで一気に下る。雪訓の終わりごろからガスが濃くなり、北岳山頂は雲の中に没した。急いでテントを畳み、下山。1時間ほどでバス停に着く。下山途中三谷がついにばてた。彼は前日の夜から食欲減退と風邪による不調を訴えていた。しかし、田形と二人で遅れて無事下山する。

## 6. 個人山行 (蝶ヶ岳) 5月30～31日 参加・古瀬、和田

5月30日(土・曇りのちみぞれ) 上高地 8:50→徳沢 10:30→長堀山 14:00→蝶ヶ岳ヒュッテ 15:00  
朝、上高地は曇り。穂高が見えずがっくり。長堀尾根の1/3ほどから雪がついている。赤布が多いが分かりにくいところもある。長堀山頂上はみぞれ。雪は無いが寒い。蝶ヶ岳ヒュッテの冬季小屋に入る。何も見えない。悲しい。

5月31日(日・曇り) 出発 6:00→蝶ヶ岳 7:00、発 8:00→横尾 9:40→上高地 12:30  
稜線上に新雪が積もっている。わずかに穂高が見えかくれするがガスが激しい。ライチョウのつがいと記念撮影し早々に下る。堅い雪の下りはアイゼンがないといやらしい。昼ごろ上高地着。結局晴れないまま(文責 古瀬)。

## 7. 個人山行 (滝川水晶谷) 6月13～14日 参加・寺島、古田 (非部員)

6月13日(土) 三峰口→秩父湖→川又→釣橋小屋上の二股  
所沢発の始発で出発。川又行きのバス(?)は怪しげな音楽(東京ではごみ収集車が流す音楽だと思うのだが)を流しながら走っていた。しかも、料金箱も怪しげで、百円玉のお釣りが出ない仕組みとなっていて(運賃は安い)、千円札を出したら50円玉と10円玉がどっさり返ってきた。沢へは天狗岩トンネルの手前を下って取りつくののだが、道路が川のかなり上につけられているので、下るのが結構大変。今回は納涼のために来ているので「泳ぎ」のはずだったが、沢に足を踏み入れ、あまりの冷たさに、すぐに「へつり」に変更。どんなところも無理やりへつって進む。しかし、私は何度もへつりに失敗、かえってびしょぬれになっている自分に気づくのがだった。途中、釣り師と対立しながらも沢登りを楽しむ。釣橋小屋は汚かったので、その少し上流の二股でビバーク。

6月14日(日) →水晶山→雁坂峠→川俣  
昨日同様、この日も「へつり」で行く。もう水流も無いと思って靴に履き替えてしばらく行くといきなり35m滝がドンと出てきた。微塵も登ろうという気が起こらなく、当然の如く巻いたところ、古田さんは滝の横の草付を、足元の土をどンドン崩しながら登って来てしまった。見ているほうが気が気ではなかった。この滝で今度こそ本当にこの沢は終わり、あとは藪こぎもほとんど無く、水晶山の頂上に出た。雁坂を経て川又に下山。

## 8. 個人山行 (丹波川本流、小室川谷) 7月3～4日 参加・寺島、古瀬、淵沢、山内 (OB)

7月3日(金・曇り時々晴れ) 丹波川本流  
2時限が終わって集合し、奥多摩駅からタクシーで橋に着いたときは既に2時半。急いで遡行を開始。水はぬるいがかなり多い。暗いゴルジュでいきなり泳ぐ。淵の手前の1m滝は左からへつっていったが二人目のFが滑ってハーケンが抜け、流されたので右から行ったらやたらに楽だった。時間もなくなったので(5:30頃)車道まで上がり、小室川出合いまで行って焚き火。登山道の上でビバーク。

7月4日(土・晴れ時々曇り) 小室川谷

全体的に薄暗い沢。S上状滝は直登できず、ちょっと戻って右から巻いたらとんでもなく上がってしまい、ザイル2本の懸垂で降りたら、松尾沢出会いの上に出た。その上の5mの滝ではザイルを出し、泳いで直登。つめは急な藪こぎ30分の後、なだらかな笹藪帯に出、左へ進むとぼったり大菩薩の草原に出る。真っ暗になる頃ちょうどタクシーに会い、塩山へ（文責 古瀬）。

## 9. プレ夏合宿（南八ヶ岳） 7月25～26日 参加・寺島、古瀬、和田、湊沢、三谷

7月25日（土・晴れ）甲斐小泉5:20→三つ頭登山口6:05→観音平7:20→雲海展望台9:00→発11:45→観音平12:20

前日のうちに甲斐小泉に入り、駅前でステーションビバーク。一年生の二人は良く眠れなかったようだ。プレ夏という性格上、一年生にはそれまでの山行以上の重さの荷物を持たせているので、ゆっくりしたペースで登り始める。観音平を過ぎたあたりから三谷が歩き渋りだす。三谷には寺島が付き添い、他の者は先に行くこととする。共同装備、食料は全て抜いたがそれでもあまり進まない。ふらふらになりながら、皆の待つ雲海展望台に着く。バテの原因の一つが睡眠不足（根本的には本人の不規則な生活）のようだったので、二時間休憩を取ることで、キレットは無理としても青年小屋まで行くことにする。しかし結局、本人が帰りたいと強く言うのでこの日は観音平に引き返すことにする（計画ではキレット泊まり、翌日、赤岳、阿弥陀岳を経て美濃戸口に下山）。（文責 寺島）

7月26日（日・晴れ）観音平発5:50→雲海展望台6:40→押手川7:15→青年小屋11:10→押手川11:50→雲海展望台12:10→観音平→小淵沢

前日に体調を崩した三谷と付き添いの寺島は観音平に残って、古瀬、和田、湊沢で権現岳往復に行くこととする。編笠山を巻いて青年小屋へ行く。かなり雪の残った北アルプスがくっきり見える。ここから岩場が出てくるが問題なし。気持ちよい頂上でパイナップルを食べて時間をつぶし、下りは一気に下る。観音平で合流後、小淵沢まで下る。車道歩きは暑く、車が多く、つらい（文責 古瀬）。

## 10. 北アルプス縦走（湊沢→北穂→槍ヶ岳→針ノ木岳→唐松岳）参加・天羽、寺島、古瀬、和田

8月2日 立川発

8月3日 松本→新島々→上高地9:15→横尾12:00→湊沢15:00

荷物が重く、横尾から湊沢までがつらい。ヨレヨレになって到着。

8月4日 起床4:00、出発5:30→北穂東稜7:00→上部のコル8:15→北穂頂上9:00→湊沢10:30

途中まで南稜と同じ道を行き、雪渓をトラバースして東稜に入る。合流点付近は崩壊に注意。その後は懸垂下降が一ヶ所あるくらいで問題なく頂上へ出る。頂上から槍、鹿島槍さらには白馬まで見わたせた。南稜より湊沢に下山。

8月5日 起床4:00、出発5:15→前穂北尾根5、6のコル6:05→4、5のコル8:30→4峰

8:30→3峰11:00→前穂11:50→奥穂→ザイテングラート

雪渓を登り、5、6のコルに出る。4峰上部は崩壊が激しいが、和田が一人で行ってしまい落石を起こす。幸い怪我が出なくて済んだが、死人が出てもおかしくなかったほどだった。そこからザイルを張って4峰頂上に達するが、次第に天気が悪くなってくる。3峰の登りでは、チムニー状の部分と、その上部の2ピッチにザイルを出し無事通過。そこからしばらくして頂上に着いたが先程の事故を思い出し、生きてここにつけたと思ってホット息をつく。ゆっくりしたあと奥穂高を経て湊沢へ下山。

8月6日(天羽、古瀬、和田は縦走へ。寺島は下山)起床4:00、出発5:25→北穂7:50→南岳10:50→中岳12:10→槍山荘14:00→殺生ヒュッテ18:00

ピッケルを4本差した寺島と別れ縦走に出発。2日前と打って変わり、北穂の頂上は霧の中でとても寒かった。いよいよ大キレットに進むが、濃い霧の中でこの先がどうなっているのか良く分からない。しばらくは、下りが続いた。それにしても鎖場が多い。時々、和田が谷に飛び込みそうになる。先が見えないというのは辛い。南岳までがやけに長く感じた。槍の肩のテン場は一杯だったが、隅に一張り分の空きがあったので、昼寝をしてくつろいでいたが、夕方になって下の殺生ヒュッテに追いやられてしまった。

8月7日 起床4:00→出発5:10→槍山荘5:30→槍山頂出発7:25→双六小屋10:20→三俣山荘13:00

今日もひどいガス。昨日、余分に下った登りがやけに辛い。槍のピストンに軽装で出かけてしまい大後悔。渋滞でなかなか進めないの、体温がどんどん奪われて行く。天羽はたまらず引き返し、和田と古瀬だけが登頂した。周りが見えなくて退屈な下りが続いたが、双六小屋に着く頃には時折晴れ間がのぞくようになった。寒さと貧弱な昼食のせい、小屋のおでんがやたらに気になる。においはただなので、他人が食べるのを食い入るように眺めながらおいだけをひたすら吸い込んだ。次に来るときは必ず食べようと三人で誓う。ハイマツの中を進み三俣小屋に着く。

8月8日 起床3:30→出発5:10→鷲羽岳6:05→水晶小屋7:10→野口五郎9:30→烏帽子12:00

朝から台風が気になるのでラジオを聴きながら歩く。台風が雲を集めているのか、雲が無い。野口五郎で台風のため下山するというお婆様方に食料をいただく。涙が出るほどうれしい。だんだん天気が怪しくなるとゆき、烏帽子の手前で雨がポツリ、ポツリと落ちてきた。ちょうど烏帽子のテン場は窪地で風雨を避けるのにもってこいだったのでそこで泊まることとする。

8月9日 沈殿

台風の直撃は避けられたが本日はお休み。水を買う金が無かったので鍋に水をためて飲んだ。「青い」という表現がぴったりの水だった。

8月10日 起床4:00、出発5:00→烏帽子岳6:00→不動岳7:25→船窪岳9:30→分岐11:00→針の木沢11:45→針の木小屋14:40

予定では船窪小屋までだったが、沢に降りると針の木まで行けそうだったので、二日分進む。烏帽子岳はカッコいい岩山だった。船窪岳までは良いペースだったが、沢へ降りる分岐がどうも地図と違うようでなかなか見つからなかった。これは船窪岳の表示が違うようで、分岐は思ったより小屋に近いほうにあった。また、船窪岳の周辺はガレていてあまり気持ちよくない。針の木沢への下りはきちんとした道だったが最後の所だけアルバイトだった。そこが和田の気に召さなかったようで機嫌が悪かった。逆に天羽は先に沢に降りてウサギを見つけ上機嫌だった。最後の小屋までの登りは三人とも疲れ果ててしまった。小屋でスケッチしている人達と、ため息をつきながらうずくまっている我々三人は笑えるほど好対照だった。

8月11日 起床4:00、出発5:30→針の木岳6:10→赤沢岳7:50→鳴沢岳8:15→新越乗越8:45→種池山荘10:30→爺ヶ岳11:25→冷池小屋13:00

あまりアップダウンがきつくないので楽に進む。遠くから見るとメルヘンチックな種池山荘が心を和ませる。

8月12日 起床4:00、出発4:55→鹿島槍6:05→キレット小屋・五竜小屋10:50→テン場12:30

いよいよ鹿島槍だ。北と南の分岐というだけあって、南峰を過ぎると途端に岩っぽくなる。岩が出てくると和田が怖そうに進むのを見るほうも怖い。八峰キレットは大キレットに比べると格段に簡単だ。それよりも五竜の登りのほうが、姿が見えないだけに気が滅入った。霧の中、五竜に到着する。小屋へ着く頃には雨が降り出した。早ければ唐松まで行こうと思っていたがここでストップ。この小屋は水が安いのでうれしい。

8月13日 出発9:00→唐松岳11:30→白馬駅14:30

朝から大雨。風も強く、フライをめくり上げ、テントの中に水がどんどんたまって行く。小屋に天気予報を聞きに行くと2~3日は雨が続くとのこと。話し合いの結果、このテントでは耐えられない、金もぎりぎり、技術的に見て白馬まで安全に行ける保証が無い、と言った点から下山を決定した。唐松まで行って八方尾根を下る。

### 11. 那須高原沢登り 8月24~28日 参加・天羽、寺島、古瀬、和田

8月24日 白河15:25→新甲子温泉ホテル前18:05、発18:30→甲子温泉19:20

ものすごい雷雨のためしばらくの間ホテルの軒下で雨宿りする。稲妻が見えた。

8月25日(晴れ)阿武隈川白水沢左股 起床6:00→遡行開始7:25→二俣9:00→遡行終了10:40→テン場12:00

温泉のすぐ先から遡行開始。最初から滝がある。寺島を先頭に出発。皆なかなか良いペースで進む。二俣前と後に一度づつザイルを出す、練習という感じで楽に終わった。つめのヤブこぎも短い。

8月26日(晴れ)阿武隈川南沢右俣(晴れ)起床5:00→遡行開始6:30→二俣8:45→甲子山10:40→テン場11:40

出合いは貧弱であまりやる気が出ない。今回行った3本ともに水量が少ない。ここは適当に滝があり退屈せずに進むことができた。つめは奥の二俣を右に進み、石畳を這い登り、少しだけヤブに入ると頂上に飛び出す。

8月27日 阿武隈川本谷 起床3:00、出発4:00→砂防ダム5:10→雌滝5:50→雄滝6:10→天狗沢出合いの先7:30→15mの滝の上11:00→遡行終了15:15→三本槍16:00→甲子山18:15→テン場19:15

いよいよ今回のメインイベントとなった。長いのが分かっていたので、日の出までに遡行地点まで林道を進んでおくことにする。すぐに雌滝に着く。ハング状の立派な滝だ。雌滝を高巻いて降りたところに雄大な雄滝が待っている。直登もできるとは書いてあるがとてもそんな気にはなれない。ここの高巻きは、雌滝からの道を登りなおし、さらにそれを登ってゆく。途中までだが、比較的明瞭な踏跡がある。ここまで意外に楽だったのでこんなものかとたかをくくったのが失敗だった。次の二つの高巻きで時間を食い、また恐ろしい思いをした。まず20m滝は中段のバンドを利用すると書いてあるが岩はぼろぼろですぐにはげ、足場は粘土状でつるつるで登りにくい。しかし、まだここは先頭の者が登ってザイルを出せたので良かったが、次の15mでは先頭がぼろぼろつるつるに悩まされて進めなくなってしまった。右側からなんとかブッシュとハーケンを頼りに登った。そこを切り抜け、降りた所は、日がさんさんと当たりとても気持ち良かった。だが、その後に待っていたのは、2時間以上のヤブこぎだった。ここでは古瀬が頑張り、また前々からヤブこぎを楽しみにしていた寺島も満喫できたようだった。和田はあまりにうれしかったのか、最後になると同じ木にしがみついたまま動かなくなってしまった。遡行も終わり、各自、充実感と温泉への期待を胸に、縦走路でイワシの缶詰をほおぼった。

8月28日 起床3:00 和田、合流4:45→テント場、出発8:40→新甲子温泉9:25

## 1 2. 南アルプス縦走 (黒戸尾根→光岳→寸又峡) 9 月 3~12 日 参加・天羽。寺島、 湧沢

9 月 3 日 立川→葦崎→竹宇駒ヶ岳神社  
悪夢のような差し入れの雨あられ。だが、何も言うまい。

9 月 4 日 出発 5:25→笹の平 9:15→刀利天狗 12:00→五合小屋 12:55→七合小屋 14:50  
肩にかかる容赦ない重荷。水っ腹に耐えながらひたすら果物を食べ続ける。有難いことだ。体力という体力を汗に変えて、入山一日目にして早くも湧沢の足取りが危うくなる。五合小屋から七合小屋までは、無限に続くかの様なハシゴと鎖の連続。修験道の面目躍如である。古参部員は「一気に高度が稼げた」と満足げ。

9 月 5 日 出発 5:30→八合目 6:30→駒ヶ岳頂 8:20→駒津峰 9:40→北沢長衛小屋 11:50  
八合目下のレリーフに水をかけ、オレンジを置いた。巨岩の影で、ひっそりと朝の光を浴びているレリーフは周囲の緑と溶け合って、ひどく厳粛な感じがする。八合目から山頂まではかなりの急登が続き、湧沢が著しくペースダウン。山頂は見事に晴れ渡り、四方の山々が完全に視界に入った。湧沢の共同装備の一部を上級生が分担して山頂を出発。下りもひどく急で駒津峰側からの登山者が多いこともあり、なかなか思うように進まなかった。駒津峰から北沢峠までの下りで湧沢のバテ方がひどいので、天羽が予定を変更し、長衛小屋に泊まることを決定。洗濯などをしてのんびり過ごす。

9 月 6 日 出発 5:30→馬の背ヒュッテ 8:30→仙丈小屋 10:00  
仙丈小屋には水が無いため、馬の背ヒュッテで水を汲んだ。テントを張った後、天羽が仙丈岳を往復。夕食後さっさと寝る。

9 月 7 日 出発 5:05→仙丈岳山頂 5:25→伊那荒蔵岳 7:45→野呂川越 9:20→三峰岳山頂 12:50→熊ノ平 14:05  
快晴、下に雲海あり。三峰登頂頃からガスが上昇し、熊ノ平に着く頃完全な曇り。仙丈岳に登る間に日の出。見事な朝焼けである。湧沢の共同装備を全て天羽、寺島が持ったためペースはなかなか良かったが、暑さも加わり、野呂川越を過ぎるあたりから疲れが出始め、三峰山頂の近くでは湧沢、寺島がバテ気味。ひとり天羽だけが悠然とタバコをくゆらす。仙丈の下りで寺島が一度道を間違えたが、天羽が気づいて大事には至らなかった。三峰山頂から熊の平までは斜面がゆるやかなせいもあり、予定よりかなり早かった。

9 月 8 日 出発 5:10→北荒川岳 7:30→北俣岳 9:00→塩見岳 9:45→三伏峠 13:15  
塩見山頂で青山学院の人達に写真を撮ってもらう。山頂からの眺めはすばらしい。この日のコースを大部分見わたすことができ、感慨もひとしおである。塩見の下りは崩れやすく危険だった。この日から台風が本格的に動き始めた、翌日は予定を変更して荒川小屋まで行くこととする。

9 月 9 日 出発 5:10→烏帽子岳 6:05→高山裏避難小屋 11:00  
快晴、見わたす限りの雲の絨毯。烏帽子岳を過ぎた後の下りで湧沢「足がつりそう」と訴えるが、「つるなよ」の一言で終わる。高山裏までもうしばらくのところでは湧沢が腹痛を起こし、しばらく休憩。この時点で荒川小屋まで行く計画を断念した。天気が悪化してゆくので台風の到来を危ぶむ。初めて小屋の中に泊まることにした。小屋の前で長い間同じ行程をとって来た青学の人たちとお別れの記念撮影。青学はこの後荒川小屋へ向かった。

9 月 10 日 出発 5:10→荒川前岳 7:40→大聖寺平 9:30→赤石岳 11:15→百間洞 13:30  
荒川前岳の登りはひどいガレ。山頂からは腹から上を雲の上に出した富士山がとても美しく見え

た。赤石岳の登りの途中で天気図をとったところ、台風は北に進路を変えたのであまり心配はなさそう。百間平は広くてとても歩きやすく、暖かくて心地よかった。期待していた新築の小屋は完成まであと二日かかるとのこと。とりあえずテントをしっかり張って台風に備える。

9月11日 出発 5:15→小兎岳 7:35→聖岳 10:25→聖平 12:25

台風は早朝、太平洋沿いを通り過ぎたが、風が強い上足場も悪いので慎重に進む。聖岳の下りは急で危険。聖平では青学の人が水場の場所を板切れに書き残しておいてくれた。

9月12日 出発 5:15→茶臼岳 8:25→光小屋 12:55 (往復)

合宿で初めての曇りの朝。登りの途中で雲が生き物のように湧いてきては様々に形を変える。だが、ホワイトアウトにはならなかった。茶臼までは楽なだらだら坂が続く。山頂からの眺めは良くない。茶臼山頂の近くで天羽が狸らしき動物を発見。ハイマツの陰でよく見えなかった。光岳の登りは岩だらけの急登。易老岳を過ぎてしばらくすると、上空が完全に雲に覆われ、雨が降り出すのではないかと思われた。光小屋は立派で広いので小屋に泊まることにする。紅茶で一服したあと光岳山頂へ行った。山頂は高い木々に囲まれ、いまひとつ登頂の実感がわからない。10mほどのところに展望台があったため、そこに行ってみることにする。眼下に大きな湖が見えた。下界は。夜は月がきれいだった。

9月13日 出発 5:30→柴沢 7:35→寸又峡温泉 14:15

光小屋からの朝焼けはぞっとするほど美しかった。富士山の後方から毒々しいほど鮮やかなオレンジ色の帯が地平線の上に広がり、日の出が垂れ込める雲を金色に染めながら紫、青と微妙に色合いを変えて空に拡散してゆく。ぼんやりと紺色に浮かび上がる山々は水墨画のようだ。光小屋から柴沢まではかなり早く着いたものの、その後の40kmの林道歩きはどう考えても予定通り進めそうもない。光岳の下りでふらふらになった沢がどうしても遅れがちになる。今日中に東京に帰れるのだろうか。漠然とそんな不安を抱きつつ、ひたすら歩き続ける三人を神が憐れと思し召したのか、すれ違ったトラックが再び戻ってきて、快く我々を乗せてくれた。沢は助手席、天羽、寺島は荷台のわらの上に振り落とされないようにしながら座った。車で来たというのに温泉に着いたのは当初の予定と同じ時間であった。最後の橋を渡る直前に天羽が足を負傷、片足を引きずって歩く。寸又峡温泉はすっかりリゾートと化していて、さびれた温泉宿などという雰囲気は微塵も感じられない。あまりに急激な変化に対応しかねて、複雑な気分で合宿を終えた(文責 沢)。